

命の大切さを学ぶ
教室全国作文コンクール

第4回
【優秀作品集】

発刊にあたつて

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）が受ける被害は、犯罪行為そのものによつて生じる心身の被害のみでなく、周囲の人々による心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難、社会からの孤立感など、その影響は広範囲かつ長期間にわたります。犯罪被害者等が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等を直接対象とした支援のみならず、地域社会や学校・職場、さらには将来の社会を支える子どもたちに、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深めていただき、社会全体に犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から全国警察では、これから社会を担う中学生・高校生を対象に、犯罪被害者等による講演や犯罪被害者等の手記の朗読等により、犯罪被害者等が受けた様々な痛み、子どもを亡くした親の思い、命の大切さ、被害者も加害者も出さない社会を希求する犯罪被害者等の思いを伝える「命の大切さを学ぶ教室」の開催や、大学生を対象とした被害者支援に関する社会活動への参加を促進するなど、「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」に向けた取組を、犯罪被害者等の御協力を得ながら、教育委員会、民間被害者支援団体等と連携して積極的に進めています。

中でも、「命の大切さを学ぶ教室」は、犯罪被害者等への理解・共感を生む効果が大きいものであるのみならず、規範意識の醸成にも大きな効果があります。

「命の大切さを学ぶ教室全国作文コンクール」は、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるための取組として、警察庁が平成二十三年度から開催しているものです。

本冊子は、平成二十六年度の第四回コンクールにおいて、全国から応募された作品の中から選考した

- | | |
|------------------|----|
| 国務大臣・国家公安委員会委員長賞 | 二点 |
| 警察庁長官賞 | 四点 |
| 警察庁長官官房長賞 | 十点 |

の優秀作品をとりまとめたものです。

警察としては、被害者支援に携わる方々との緊密な連携の下、今後も「社会全体で被害者を支え、被害者も加害者も出さない街づくり」の実現に向けて、「命の大切さを学ぶ教室」を始めとする諸対策に取り組んでまいりますが、本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等はもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

平成二十七年二月七日
警察庁長官官房給与厚生課長 山本仁

目 次

☆中学生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・「今を生きる」とは

石川町立石川中学校

二年 田子礼良 1

【警察庁長官官房長賞】

- ・弟の誕生から学ぶこと

横手市立横手南中学校

三年 環貫一幾 2

- ・命を大切にする勇気

寒河江市立陵東中学校

三年 白田都 3

【警察庁長官官房長賞】

- ・芽生えたもの

大田区立大森東中学校

三年 伊藤凌規 4

- ・自分の命、周りの命

北杜市立甲陵中学校

三年 進藤郁香 5

- ・命の大切さ

尾張旭市立東中学校

一年 木股千乃 6

- ・「認め合うこと」

広島市立中広中学校

三年 萩野亜結 7

- ・犯罪被害者の思いを理解する

佐世保市立三川内中学校

三年 福本朱莉 8

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・命のはかなさ
富山県立糸羽高等学校 一年 木村 優花
10

【警察庁長官官房長賞】

- ・透明人間
石川県立金沢辰巳丘高等学校 二年 久田 琳佳子
12
- ・命の大切さを学ぶ教室の講演を聴いて
香川県立農業経営高等学校 三年 今橋 遥奈
14

【警察庁長官官房長賞】

- ・命の大切さを学ぶ教室をきいて
青森県立黒石商業高等学校 三年 佐藤 紗香
16
- ・命の大切さ
秀明八千代高等学校 二年 重岡 七海
18
- ・「今」
静岡県立吉原高等学校 三年 芦澤 沙奈美
20
- ・当たり前ってなんだろう?
三重県立四日市高等学校 二年 長野 真帆
22
- ・命の大切さについて
高知県立高知丸の内高等学校 三年 野村 菜穂
24

【中学生の部】

「今を生きる」とは

(福島県警察)

石川町立石川中学校二年

田子礼良

命。私たちはその身近にありながら、命の大切さを本当に分かってい るだろうか。私は正直、命について考えることはあつたとしても、命の危険をそばに感じることはなかつたと思う。

そんな私が命を意識するようになつたのは学校で行われた、「命の大 切さを学ぶ教室」を受講したことがきっかけである。教室では交通事故で娘さんを亡くされた女性が当時の事を話してくれた。私たちと同じ中学 生だったその少女は朝まで、妹と笑顔で会話をし母親にいってきますと 言つていつものように家をあとにした。その日の夕方、彼女は命を落と した。私は思い浮かべた。今朝のことを。朝練がある私は母と少し話をし てすぐに家を出た。そんな私の後姿に命の危険など母が感じるわけがな い。きっと亡くなつた少女のお母さんも当時、そんなふうには感じなかつたはずだ。そうなのだ。いつもここにある普通の毎日を支えているのが私の命なのだ。そして私はこの命があるから父や母、妹と話すこと ができる。日々がその証である。そう思うことができた。でも私が生きる

時間が誰かの生きたかつた未来のかもしないのだと、女性の話を聞 いて感じた。それと同時に、私にもいつも命の危険がそう遠くないところにあるということを実感した。なぜなら、話してくれた女性が私たちにつらいはずの過去を最後まで伝えてくれたからだ。目に涙を浮かばせ て、私たちに「命の大切さ」を教えてくれたのだ。何気ない毎日をするた めにこの命を大切にしていきたい。そして私は命についてもつと家族と 話したくなつた。

私は教室のあと、母と命について話すことにした。母は私に知り合いの 救命救急士さんの話をしてくれた。いつも生死と間近で向き合つて いる仕事だ。ある日、子供を連れて車に乗つていたお母さんが、子供にシートベルトを着用させなかつたために、事故でお子さんを亡くされてしまつた。一生懸命助けようとしたけれど、息が戻つてくることはなく、とてもショックを受けたと、母に話していたという。母はそれ以来必ずシートベルトを 確認して車を走らせるそうだ。私は母がそんなふうに気をつけてくれてい たことを知つて、嬉しくなつた。母と命の話をして良かったと思つた。母は 私や妹の命をとても大切にしてくれているのだと、安心した。私は色んな 人に、この命を守つてもらつて、今を生きている。

「命の大切さを学ぶ教室」。この教室を受講して、家族と命について話し て深く考えることができた。前よりずっと自分の命を大切にするようになつた。今、生きていることで私は笑うことができる。泣くことができる。 その命が自分だけのものではないということを忘れず、これからもたくさん のことを感じ、たくさんのこと学んで、毎日を生きていきたい。

弟の誕生から学ぶこと

(秋田県警察)

横手市立横手南中学校三年 環貫一幾

横手南中学校で昨年と一昨年、「命の大切さ集会」が開かれました。すぐ下の弟が小学三年生になっていたので、年の離れた弟が産まれるということはうれしい反面、

少し恥ずかしいような不思議な気持ちでした。母のお腹が少しづつ大きくなっていくのを間近で感じ、母が体調を崩すと一緒に不安になつた十ヶ月。家族みんなが母をいたわり、お腹の中の赤ちゃんに思いを寄せ、気持ちを一つにした十ヶ月。だから、無事に母が出産を終えて、小さな小さな弟と家に帰ってきたときの喜びは大きいものでした。

赤ちゃんの世話は本当に大変です。顔を真っ赤にしてパワー全開で泣きます。言葉を話せないのでなぜ泣いているのか分かりません。オムツを替えたり乳をあげたり抱き上げたり、みんなが弟のことを考える毎日でした。そんな小さかった弟も一人で立てるようになり、歩き、ご飯を食べ、言葉で何かを伝えようとするようになりました。

僕は、弟の誕生や成長を通して、自分自身がどのようにして産まれ、どのように成長してきたのかを知ることができているのだと気づきました。家族みんなが、地域の人たちが、この小さな弟を大切にし、可愛がっています。僕が産まれたときは、きっと初めてのことばかりで苦労しながら、でも愛情をたくさん注いで育ててくれたことでしょう。

これからも弟の成長を家族みんなで見守りながら、産ませてきただこと、が終わるというだけのものではないということを考えさせられました。

「命の大切さ集会」を通して、僕は「死」というものが、自分自身の人生が終わるというだけのものではないということを考えさせられました。

一つの命には家族、友人などたくさん的人が関わっているのです。だから、一人の「死」が他の人の人生にも大きな影響を及ぼすのだということを、僕たちは知らないわけないと思います。

命を大切にする勇気

(山形県警察)

寒河江市立陵東中学校三年

白田都しらたみやこ

私の祖父には、大切な妹を不慮の事故で失つてしまつた経験があります。男一人女四人の兄弟の長男でした。妹四人のうち、一人は幼いころに病氣で亡くなり、もう一人も幼いころに家の隣の水路に落ちてしまい、おぼれて亡くなつたそうです。この話を初めて聞いた時、私はあまりの衝撃に声を失い、胸が押しつぶされそうな深い悲しみを感じました。

今回、「命の大切さを学ぶ教室」で市原さんのお話を聴き、祖父の悲しい経験が頭をよぎりました。病氣や不慮の事故によつて失つてしまつた命でさえこんなにも辛く苦しいのに、人の手によつて故意にもたらされてしまう死を経験した人の悲しみは、どれだけ深いのでしょうか。想像しただけで、息が詰まりそうになります。

大切な息子さんの命を奪われてしまつた市原さんのお話は、私の心の奥深くに染み渡るものでした。「生きているということは手を握れる」という言葉が特に印象的でした。私の祖父も、すでに息を引き取つた妹の冷たい手を取り、妹の名をただひたすら呼びかけ続けたのかもしれません。ません。ぎゅっと握りしめた私の手の中には、確かにぬくもりがありました。この手は、人を幸せにすることも不幸にすることもできる手なのだと気づき、大切な人を傷つけるような生き方を選びたくないと強く思いました。

普段の学校生活では、命がいかに尊いものかを意識して過ごすことは少なく、元気に毎日過ごせていること、仲間と笑い合えることはよく当たり前のことです。けれども、現実には、いじめや自殺などのニュースもあり、そんなニュースを耳にするたび、心がしめつけられます。いじめにも被害者と加害者が存在します。市原さんから、「加害者がいなければ被害者は生まれない」ということを教えていただき、私は、自分の行動を変えたいと思いました。もし私の身近に助けを必要としている人がいるならば、自分がかけられてうれしい言葉やほつとする言葉をかけてあげたい。少しでも元気を取り戻してもらえるような話し方や接し方を心がけたい。そんな小さなことでも、相手を大切に思い、行動することは、「自分と他人の命の両方を大切にすること」につながると思います。

私たちは、市原さんのような犯罪被害者の方々の思いや願いをしっかりと胸に刻み、加害者も被害者も存在しない平和な社会を作つていくために、努力していくなければなりません。人間は弱い生き物ですから、すべての人にとって心の支えや仲間の存在が必要だと思います。私は、誰かの心の支えとなれる強さと優しさを身につけたいと心から思います。そして、たとえ自分が苦しい時にも逃げ出すことなく、現実と向き合い、命を大切にする勇気をもつて生きていきたいと思います。

芽生えたもの

(警視庁)

大田区立大森東中学校三年 伊藤凌規

「命」がどれだけ大切か真剣に考えたことがある人は、中学生の私達の中では、あまりいないのでしょうか。私もただ長生きしたいぐらいしか思つたことがなかつたです。

しかし、「命の大切さを学ぶ教室」を受講して、私の心の中に考えさせられるものが少し芽生えました。

その教室でお話をしてくれたのは、本当にご自身の息子さんが、交通事故に遭われた方でした。

飲酒運転の車にひかれ命を落とした話は勿論ですが、それより私の胸を痛い思いにしたのは、母親としての気持ちを聞いた時です。それは、息子さんから今日、帰りが遅くなると連絡が来た時迎えになんて行かないと言つて、息子と電話を切つて、二度と生きて顔を合わせることができなくなつてしまい、あの時に迎えに行つていれば良かったと、今も自分を責める日々が続いているということです。その時私は、交通事故が息子さんだけでなく、その方の心まで殺されてしまったように思いました。

人が亡くなると一番悲しみ苦しみ続けるのは、間違いなく家族です。そう思つた時「命の大切さ」が分かつた気がしました。一つの「命」は、家族や友達など関わつて支えてくれた人達のおかげで育つきました。だから自分のものであつて自分のものではないのです。ということは、自分で命を落とすこと、ましてや他人が奪つてはいけないのです。

私の両親は、我が家を出る時に必ず「気をつけて行きなさい」と言います。今までには、流れのように「はい、行つてきます」をただ言つていたところがありましたが、これからは、親の大切に思う気持ちを忘れずに「ありがとう」という気持ちを込めた「行つてきます」を言つていただきたいと思います。

それから、この教室を受けて芽生えた考えを少しづつでも大きくし、花を咲かせ、種にして、その種を私の大切な人達にも分けていけるような生き方ができたらいいと考えています。

そして、頭の中に私の家族の顔が浮かびました。毎日の生活から家族一人でもいなくなつたらどうなるか、考えただけで恐ろしくなり、震えるような感じがしました。

飲酒運転をした人も「命の大切さ」について深く考えたことがなかつたと思います。心の何處かにその考えがあれば、酒を飲まないとか、運転をしないということを思い浮かべたかもしれません。つまり、自分だけではなく周りの人達のことも考えることが「命の大切さ」に繋がるのではないでしょうか。

自分の命、周りの命

(山梨県警察)

北杜市立甲陵中学校三年 進藤郁香

ない感情だったのだろう。

今、こうして家族がいて、友達がいて、周りの人がいること。その中で笑ったり、泣いたり、喜んだりできる」と。いつも当たり前のようにして

いたことがどんなに特別なことか。私は、犯罪被害者遺族の岩間さんはこの事件で亡くなってしまった旦那さんの命にも、周りの人の想いが寄りそつていた。とめていたのだ。旦那さんの命にも、周りの人の想いが寄りそつていた。

自分の命は、自分でのものではないようと思つた。

大きな広い世の中から一つの命が消えても、世の中も時も動き続く。でもその命の周りにいた人たちの心には、ポツカリと大きな穴があく。

私にも、大事なクラスメイトが長期間入院していたことがあつた。寂しいし、すごく大事なものが欠けている感じがした。それが一生続くと思うと、本当に辛い。

今回この命の講話を聞いて、やはり恐ろしいものはあつた。しかしそれ以上に、岩間さんへの感謝の気持ちがあつた。岩間さんは、この出来事の一一番近くにいて、辛い想いをこの八年間たくさんしてきただと思う。そして時は流れ、事件の話になつた。その状況が自分の中リアルに浮かんできて、呼吸も忘れるくらい身体が固まっているのが自分で分かつた。とても胸がつまるような想いだつた。でもそれ以上に、それをすぐ側で感じていた岩間さんは、当時も、八年経つた今でも話していて辛かったと思う。そして岩間さんが言つていた、感情がなくなるような想い。それはきっと、岩間さんにとって忘ることのできない、感情になら

つかこののような犯罪や、絶えず起きている悲惨な事件がなくなる世の中になればいいなと思う。

命の大切さ

(愛知県警察)

尾張旭市立東中学校 一年 木股千乃

私が「命の大切さ」を学ぶ教室の講師の方のお話を聞いて考えさせられたことは、命との関わり方です。

今まで、命は当たり前にあって、私はそれで当たり前に生活してきました。だからこそ、命の「大切さ」について深く考えたことは無かつたと思います。でも、講師の方の息子さんは、その命が急になくなってしましました。私はこの生活ができなくなってしまうことはとても考えられません。でも、何の罪もない人が他人に殺害されるのはおかしいと思いました。そして、こんな事件が起こってはいけない、と思いました。命は平等に与えられるものだから、他人が奪ってしまうのは絶対に許されないと、とだ、とも思いました。

私がもし殺害された少年の立場だつたらどうしていたのかは分かりません。どうしようもなく不安になります。でも、まわりの人はみんな助けてくれない、そんなことを考えるだけで嫌です。だから、人の気持ちを考えられず、平気で人を傷つけるような人にはなりたくない、

お話を聞いていて強く感じました。

逆に、殺害された少年のまわりの人の立場に私が立ついたら、少年を助けることができたかどうか、これも分かりません。私は、声を上げるのが苦手だし、自分より歳が上でかないそうもない人には、立ち向かうことすらできないかもしれません。でも、私は、親や地域の方々に見守られて、ここまで成長してきました。親や地域の方々は、自分以外の命も守り、育ててくれているから、私もどんなに怖くても、勇気を出して声をあげ、人の命も守れる人になりたいと思いました。

私は実際、自分がされて嫌なことは、相手にもしないようにしています。小さなことでも、知らない内に大きな事件になってしまふかもしれないからです。私はこのお話を聞いて、私のまわりでこんな悲しい事件が起こるのは、絶対に嫌だ、と思いました。講師の方の息子さんはもう戻らないけど、これ以上、犠牲者を増やさないためにも、悪いことは悪いと見過ごさずきちんと認め、人のことを考えられるような人になりたいと思います。そして、命を大切にしない人が、これから減つていけばいいな、と思います。

「認め合うこと」

(広島県警察)

広島市立中広中学校三年 萩野亜結

「ここに一枚の丸めた紙があります。丁寧に広げてシワを伸ばします。みなさん、見てください。どんなにきれいにシワを伸ばしても紙は元通りにはなりません。一度傷ついた心も、この紙と同じなのです。」

「命の大切さを学ぶ教室」で、この言葉を聞いた時、私はドキッとしました。なぜなら、私もいじめを受けたことがあるからです。

新しいクラスになつて四人グループで仲良く学校生活を送つていた時、グループの中心の子が私を嫌つて、いつの間にか仲間外れにされました。その子が私の悪口をコソコソ言ふらし、あつという間に教室の

空気が変わつてしましました。みんなが私を見て笑つたり、あいさつをしても変によそよそしかつたり、教室の中に私の居場所がなくなつてしまつたのです。信じていた友達に裏切られて、「もう学校なんて嫌、行きたくない。」と何度も思いました。この時の私の心は、まさに丸められたあの紙のようでした。

私はこのいじめの経験から、いじめをなくすにはどうしたらいいのかを真剣に考えるようになりました。いろいろ考えた挙句浮かんできたのは、一人ひとりは違うということを理解した上で、相手の良さを認めていくことが、いじめをなくしていく最善の方法ではないかということです。いじめは、人ととのちょっとしたずれ違いから起ります。自分と意見が違うからといって相手を攻撃したり、無視したりするのではなく、相手の意見をよく聞いて話し合えば、ずれ違いをなくすることができるのではないか。この世の中には、誰一人として同じ人間はありません。だからこそ、一人ひとり違う考え方を持っているということを理解して、お互いを認め合うことが大切だと思います。

私の心の傷は、今も残っています。あの丸めた紙のシワのように、一生消えることはないでしょう。でも、今は辛くはありません。それは、私の良さを認めてくれる友達がいるからです。そして、私自身も相手の良さを認めてつき合うことができるようになったからです。心の傷があるからこそ、人に優しく接することができるようになったと思います。違いを認め合い、お互いに歩み寄れば、きっといじめをなくすことができる信じています。

そんな時に、私に優しく声をかけてくれた友達がいました。彼女は私の良いところを認めてくれ、「何も悪いことをしていないのだから、堂々と胸を張つていれば大丈夫。悪口なんかいちいち気にしないほうがいいよ。」と励ましてくれたのです。彼女のおかげで、少しずつ人目が気にならなくなり、私への悪口や無視も次第になくなつていきました。

犯罪被害者の思いを理解する

(長崎県警察)

佐世保市立三川内中学校三年 福本朱莉

私は、中野明人さんの「犯罪被害者の思いを理解する」という講話を聞いて、改めて命の大切さを学びました。

私は、普段ニュースなどで犯罪に関わることを見たり聞いたりしても「怖いなあ、いやだなあ」や「犯人つかまつたんだ、よかつたじやん」などしか思いません。もし考えたとしても犯罪被害者より加害者の動機などに対する「なんでこんなことができるの」と加害者への怒りしかないと思います。しかし、今回の講話を聞いて加害者のことばかり考えるのではなく、被害者の気持ちも考えなければいけないということがわかりました。だから私は、被害者の悲しみを理解することで被害者の支えになるのではと考えました。

中野さんは、被害者は「同情」よりも「理解」を求めているのだとおっしゃいました。私はそこで、本当に大切なことは「理解してあげること」と学びました。「かわいそうだなあ」よりも、まず相手の気持ちをわかってあげることが必要だと思います。犯罪は決して自分に関わりがないとは言えま

せん。これから生きていく中でこのような場面があるかもしれません。その時は中野さんから学んだことをいかしたいと思います。

私は、「いじめ問題」も同じで、いじめられた人は同情や謝ることよりも理解してほしいのだと思います。以前私のクラスでもいじめがありました。今でも、そのいじめられた生徒は学校には来れるものの、私たちと一緒に授業を受けることはまだできません。私はその生徒がいじめられているのを知つておきながら助けることができず、ただ見てるだけでした。そのことについて私は、その生徒の家に行き「ごめん」と謝りました。私は謝ったことで少しはその生徒の心の苦しみを和らげることができたのではないかと思いました。でも、よく考えると謝つただけで本当に苦しみはなくなるのだろうかと思いました。そこで、中野さんの言葉をきっかけに大事なことに気づきました。本当に大切なのは、きちんと向き合つて一度話すことだということです。ですから、今後その生徒と少しでも会話をして、理解を深めたいと思います。

最後に、人は誰かに支えられていることで今の自分が存在しているのだと思います。助け合いながら命の大切さを学んでいくのです。周りに悩んだりしている人がいたら、私の力が支えとなつて、その人に少しでも笑顔が増えたらいいなと思います。

【高校生の部】

命のはかなさ

(富山県警察)

富山県立呉羽高等学校 一年 木村優花

私は、今回のこの命の大切さを学ぶ教室の講演を聞くまで、自分の命や他人の命について深く考えることがほとんどありませんでした。小・中学校でも何度も命の大切さに触れる機会は設けられていたものの、事故や病気にも自分さえ気を付けていれば大丈夫、というような軽い認識しか持つことが出来ませんでした。そして、そのような認識を、この機会に改めることができました。

命はあっけなく消えてしまい、いつどんな瞬間に自分の世界から大切

な人達が消えていくのか分からぬということを分かっていたつもりでした。でも、その事の恐ろしさを私はあまり理解出来ていなかつたのだと思います。なぜなら、自分の世界から大切な人が消えるのは遠い先の話だと考えていましたからです。しかし、別れは突然訪れる。そしてそれがいつなのか、私達には分からぬ。だから今をあたり前の時間だと思つて生きるのはやめて、一分一秒を奇跡と思って生きようと思います。

今回、話をしてくれた講師の方は、事故の日から十四～十五年も持つておられるというのが初対面の私にも伝わりました。家族を事故で亡くされた方の話を聞くのは、初めてだったのですが、テレビなどで聞くのは全く違い、リアリティが溢れていて自分の中で映像が鮮明に映し出されました。それと同時に、講師の方の家族に起こつた出来事は決して他人事ではないと感じさせられました。

講師の方は、娘さんや息子さん、また講師の方と同じような境遇にあつた方々に支えられ普通に生活することが出来るようになつたとおっしゃられたので、それを聞いて安心したのですが、講師の方はただ単に生活を送れるようになつただけであり、夫を亡くされた悲しみから立ち直れたわけではなかつたのです。人と人が支え合うことは、生きていく上でとても大切なことだと思います。しかし、どれだけ多くの人で支え合つても、大切な一人の人を失つたという事実は消えることはないし、悲しみを忘れ元のように生活するというのは、簡単に出来る事ではないのだと思いました。

講師の方は、事故の話をするのは辛いと思われるのに、なぜ辛い過去を思い出し私達のような他人に事故の話をしてくれたのだろうか。私は、考えました。きっと、講師の方は私達に同じ思いをさせたくないかったのだと思います。一つの事故がどれだけの影響を周りに及ぼすのか、自分の家族がいなくなるということはどういうことなのか。今回話を聞いた私も、全てが分かつた訳ではないのですが、話を聞く前と比べ今は命の重みとか、家族・友達・その他の人々の大切さについて

深く考えるようになりました。

私は、家に帰ってこの講師の方の話を家族にしました。私のように家族や友人に講師の方の話を伝えた人は沢山いると思います。このように、講師の方から私達へ、そして私達からその周りの人達へ。講師の方の話は、伝わっていくのではないかと思います。そして、話を聞いた人たちが命のはかなさや命の重みについて深く考えるようになり、結果的には少しでも事故というものが減つていけばいいなと願わずにはいられませんでした。

透明人間

(石川県警察)

石川県立金沢辰巳丘高等学校二年 久田琳佳子

私は母はいません。私が小学校に上がる前の年の秋に、母は病気で亡くなりました。当時の私は六歳になつたばかりで、母は私が二歳の頃から入院していましたから、母のことはあまり覚えていません。月に二度ほど、父に車で連れられて母のお見舞いに行きましたが、この人が私のお母さんなのかと不思議に思つたことをよく覚えています。母が息もなく横たわっている姿を見ても、悲しくはありませんでした。

私にとって母は透明人間です。そして今、家族も透明人間になろうとしています。

私は父と高校一年生の弟がいます。しかし、私は部活動のせいで帰宅時間が遅いため、一緒に夕食を吃るのは休日だけです。休日の夕食の時も、たわいもない世間話などはせず、みんな黙つてご飯を食べています。佐藤さんは娘の有希ちゃんが死んで、なんでもっと接してやらなかつたのか、と涙ながらに話していました。佐藤さんの家も、

日の朝、有希ちゃんと何も話をていません。有希ちゃんが所属するテニス部の三年生の引退試合に行くため、朝早く家から出た時、佐藤さんは寝ていたからです。朝ご飯も作つておらず、有希ちゃんは朝ご飯を買うためコンビニに行きましたが、佐藤さんはその事をとても悔やんでいました。「もし私が朝ごはんを作ついたら、有希はコンビニにはよらず事故にあうこともなかつた。」と、声を震わせていました。

私はその事が、人ごとだとはとても思えませんでした。家に帰つてもいつも居る人がいない、いつ言つたかもわからない返事が最後の言葉になるかもしれない、そう思うと悲しくなりました。家族で同じ家に住み、一緒に暮らしているというのに話した言葉を覚えていないというのは、透明人間になりかけていると感じたからです。

母の時のように、私は幼いわけでも家族との思い出がないわけでもありません。少ないながらも旅行の写真や共有できる昔話があります。佐藤さんが私達の前で涙ながらに語つて下さった話を聞いた後、私は家族との会話を大切にしようと思いました。事故はいつ起こるかわかりません。こうしている間にもどこかで事故は起きているのでしょうかし、一分後にはその被害者が私自身になるかもしれません。もし家族と一度と話せなくなつたら、と考えた時、私の中にはまだ話したいこと、知つてほしいことが沢山あることに気付きました。普段何も話さない分、家族どうしで知らないことが多かつたのです。

佐藤さんの話を聞いて、私はこれから家族と過ごす時間を大切にし、何てことはない自分の学校生活を話していくと思いました。

そうすることで家族に私の事を知つてもらえますし、私も家族のこと
を知ることが出来ます。いつかは必ず訪れる別れの時に、今までの事
を後悔するのではなく、思い出を悲しむことができるようにしてみたいと
思います。

母のように、私の中で透明人間をこれ以上増やしたくはありません。
母は何が好きだったのか、どんな趣味があつたのか、どんな風に笑い、
話すのか。わからないのは辛いことです、わかつてもらえていない
というのはそれ以上に辛いことです。私は透明人間にはなりたくあり
ません。自分が生まれ、今まで生きてきた時間はとても色濃いものだ
からです。佐藤さんの話を聞いて、家族との会話はもちろんお互いを
知るということが大切なのだと思いました。

命の大切さを学ぶ教室の講演を聴いて

(香川県警察)

香川県立農業経営高等学校三年 今橋遙奈

自分の息子を亡くした時の話をされていた竹治さんの表情に何となく覚えがあった。私の妹、自分の娘が病気で死んだ時の母親の顔。それによ似ているような気がした。

まだ一歳の妹が病気で死んだと聞かされた時、まだ幼かった私は何にも分からなかつた。死ぬということがどうしたことなのかよく分からなかつた。だから、あんまり悲しくなかつた。でも母親は泣いていた。父親も泣いていた。それで、よく分からないけどとても大変なことが起きたというのは子どもながら何となく分かつた。今思うと本当に変なことだつた。子どもを亡くした辛さってどんなものなんだろうと思つた。高校生になつても妹と遊んだ時のことはまだ覚えている。ずっと覚えている。「妹がもし生きていたら、今どんなふうになつていたんだろう。」とたまに考える。

講演中の竹治さんを見ていた時に、竹治さんが母親と重なつて見えた。樂しいことやおもしろかつたことなど、ずっととどめておきたい

感情ほど時間が経つと薄れていつてしまつのに、悲しいことや辛い感情はいつまでたつても色濃く心の中に残つているものだと、母親を見てきて強く印象づけられていた。同じものを竹治さんにも感じた。

息子さんを集団暴行で失つた竹治さんの悲しみは計り知れない。たつた一度の事件が、竹治さんたちに消えない傷を負わせた。体を壊してしまつほど後悔の念を抱いたお姉さんの気持ちは、きっと私の想像の範囲に収まらない。一度失つた命は戻らないし、お金で戻すこともできない。加害者がどんなものをもつてしても、命と同じ重さの償いは絶対にできない。被害者は一生元の生活に戻ることができなくなる。この苦しみは自分の身で実際に経験しないと、本当の意味で理解することはできないと思う。竹治さんにとってその事件は、忘れたくとも忘れられない出来事だつたはずである。それを、竹治さんは話していくださつた。私たちが同じような過ちを繰り返さないために。話をする度に苦しんだ記憶が蘇つて、また辛い思いをするはずなのに。

毎日、当たり前のように事故や事件などが起こつてゐる。新聞やニュースで幾度となくそれを耳にするが、私たちは人ごとだと思つて氣にもとめず、すぐに忘れてしまうことが多い。でも被害者自身から語られる事件というものは、テレビの映像よりも鮮明で身近に感じられる。実際に経験してきた人の生きた言葉ほど心が突き動かされるものはない。

竹治さんのお話には、絶対に加害者にはならないという強い気持ちを私たちに持つてほしい、という思いが込められてゐた。

被害者がなくなる社会を目指してほしいと訴えられていた。私たちはもつと命の大切さについて考えていかなければならない。命と直接ふれあうことが、命の大切さを知る上で一番大事なことだと思う。

現在、私は農業経営高校で農業について学んでいる。作物の栽培や家畜の飼育を通して命とふれあう機会を持っている。それらの命を育てるために大変な労力を必要としていることを体験した。命の犠牲で私たちの生活が成り立っていることも、もう知っている。また、今私が高校で経験している寮生活の中でも、学んだことは数え切れないほどあった。教えたり、教えられたり、傷つけたり、傷つけられたり……。同じ日を繰り返したことなど一度もない。人や生き物と接しているからこそ私は毎日変わつていけるのだと思う。

今回、竹治さんは自らの体験を通して命の大切さを伝えてくださった。私の経験と状況は全く違うけれど、この話をまっすぐ受け止めたい。そして、被害者にも加害者にもなることのないよう、命の大切さについてもつと考えてみようと思う。

命の大切さを学ぶ教室をきいて

(青森県警察)

青森県立黒石商業高等学校 三年

佐藤絢香

山内さんの第一印象は、どこにでもいそうな普通の女性だった。しかし、話題は冒頭から、事件に関する詳しい説明だった。事件の真相を知っている遺族の方が当時の気持ちとともに話をして下さったことで、より鮮明に内容が頭に入り、心に強く響いた。気持ちの部分を伝えられるだけで、ここまで心に残るのかと驚いた。話の一つ一つが印象に残つたが、同じ学生として特に忘れられない話があつた。

山内さんが娘さんの遺品を整理した際に、出てきた教材のあるページに日付が書かれていたという話だ。私もその日勉強した部分まで教科書に印をつける習慣がある。自分と同じだと共感したが、「娘はもう授業を受けることができない」という山内さんの言葉が胸に刺さつた。普段の学校生活で、面倒だと思う授業や、テストが嫌で学校に行きたくない時がある。そう思うことでさえ私は恵まれていると感じた瞬間だった。

毎日学校へ行き、友達と会い、授業を受けて部活動へ行く。意識して考えなければこの当たり前の幸せに気付くことができないかもしれない。山内さんの第一印象は、どこにでもいそうな普通の女性だった。しかし、話題は冒頭から、事件に関する詳しい説明だった。事件の真相を知っている遺族の方が当時の気持ちとともに話をして下さったことで、より鮮明に内容が頭に入り、心に強く響いた。気持ちの部分を伝えられるだけで、ここまで心に残るのかと驚いた。話の一つ一つが印象に残つたが、同じ学生として特に忘れられない話があつた。

山内さんが娘さんの遺品を整理した際に、出てきた教材のあるページに日付が書かれていたという話だ。私もその日勉強した部分まで教科書に印をつける習慣がある。自分と同じだと共感したが、「娘はもう授業を受けることができない」という山内さんの言葉が胸に刺さつた。普段の学校生活で、面倒だと思う授業や、テストが嫌で学校に行きたくない時がある。そう思うことでさえ私は恵まれていると感じた瞬間だった。

母が死んでしまうという気持ちが強かつた。空いた時間に考えることはいつも、もつと家事を手伝つておけばよかった、もつと母の負担を減らせばよかつた、もつと母との時間を大切にすればよかつた、もつとありがとうと言えばよかつたと、後悔しかけてこなかつた。毎日、後悔と辛さと怖さで泣きそくなつたが、家族と友人の支えでなんとか乗り越えることができた。母も手術後、体調が回復し、今まで通りの生活ができるようになつた。

この経験から私は、家族の大切さを身をもつて知ることができた。家族を失う気持ちは体験した本人ではないと理解できないはずだ。私も母が倒れてはじめて、後悔の念に駆られたり、夜も眠れないほどの不安を知つた。母が元気になつたからこそ、苦しみから解放されたが、今でも当時のことを思い出すと涙が出そになる。個人差はあるだろうが、家族を失うようになるだけで、肉体的にも精神的にも苦しみ追いつめられるのに、娘を理不尽にも殺害された山内さん家族、親族、友人達はどれほどのかくしみを味わつたか想像もできない。山内さんが話してくださいつた、姉を奪われた妹さんの深い苦しみ、メディアや周囲の人々からの心ない言葉、沢山の辛い出来事があった中でも、娘さんのことをずっと心に

私が高校二年生の夏、母が病であることがわかつた。普段から体調を崩すことのない母が、入院すると言つてきた。「何の病気?」と尋ねた。「がん」と母は答えた。その後の会話はあまり覚えていないが、母の前で泣かないように必死だったことは覚えている。手術が失敗したら、がんが進行していくならと思うと、ただただ恐ろしかつた。その時の私は、母が死んでしまうという気持ちが強かつた。

空いた時間に考えることはいつも、もつと家事を手伝つておけばよかった、もつと母の負担を減らせばよかつた、もつと母との時間を大切にすればよかつた、もつとありがとうと言えばよかつたと、後悔しかけてこなかつた。毎日、後悔と辛さと怖さで泣きそくなつたが、家族と友人の支えでなんとか乗り越えることができた。母も手術後、体調が回復し、今まで通りの生活ができるようになつた。

残している人達がいることへの喜び、そのすべてが心に残った。悲しいことを誰かに話すたびに、その時の辛さや苦しさを思い出してしまうことは私も知っている。いくら時間がたつても辛かった気持ちは絶対に消えない。それでも、命の大切さを私達に教えるために話をしてくださいさつた山内さんにとっても感謝している。そして今回の山内さんの話を忘れないことが大切だ。命を大切にすることは当然だ。今生きていることに感謝し、今一度、自分の大切な人に感謝の気持ちを伝えなければと思う。全く後悔のない人生は無理だろうが、せめて自分で納得できる人生を送りたい。母の時のような後悔を二度としないよう、一杯自分のすべきことをしていきたいと思う。

命の大切さ

(千葉県警察)

秀明八千代高等学校二年 重岡七海

先日、私達は命の大切さを学ぶ講演を受講しました。

私はこの講演を受けたことによって、今までただ漠然としてしか捉えていなかつた命の大切さ、重さを改めて考え方を直すきっかけができました。

講演をしてくださつた方は、私達生徒に命の大切さを教えるべく、その当時の気持ちをストレートに伝えてくださいました。それは、聞いているだけでも苦しく、理不尽な事件に憤りを覚える程でした。本当に自分の周りで同じように大切な人を奪われてしまつたら……そ

う思うだけで悲しい気持ちになり、また講演者の方の気持ちを思うと、私が今感じている悲しみや苦しみより、もつとずっと深いものを背負つているのだろうと思いました。きっと私が感じているこの気持ちは、講演者の方の言葉から受け取つた「命の重さ」の一つだと思います。

ですが、講演をしてくださつた方は悲しい出来事があつた後でも、ただ悲しみに暮れているのではなく、希望をもつて生きることを私達に伝えてくださいました。

七月十日の素晴らしい講演ののち、私はあるニュースが気になります。それは、「危険ドラッグを吸つたことが原因となる相次ぐ交通事故」についてです。「危険ドラッグ」とは、覚醒剤や大麻などと同様の、又はそれ以上の薬理作用がある物で、これまでには「合法ドラッグ」「脱法ハーブ」などと称されていたので、あたかも身体に影響がなく、安全であるかのように誤解されていましたが、大変危険で違法である薬物です。

講演者の方は現在、今回の講演のように、全国犯罪被害者の会「あすの会」会員として、学校などで体験を語る活動に取り組んでいます。それを聞き、本当に素晴らしい心の綺麗な人だと感銘を受けました。しかし、講演者の方もすぐに立ち直つたというわけではありません。家族や友人の支えがあつたからこそ、ここまで立ち直ることができたと語つてくださいました。私も改めて周りの人たちに支えられて生きていることを感じました。それと同時に、常に感謝をすることを忘れてはならないと思いました。何気ない家族との日常も大切にしていき、また私が周りの人を支えることによって、家族や友人、私を支えてくれている人たちへ何らかの恩返しをしたいと思いました。講演者の方も「生きることは大変かもしれない。でも生きていれば夢や希望に向かつて進むことができる」と訴えかけてくれました。周りの人たちに恩返しするためにも、今回の講演で感じ、教わった命の大切さを心の底に残し、これから的生活の中で生かしていきたいと思います。

その危険ドラッグによる交通事故が最近多発しています。中には八人が死傷するひき逃げ事件があり、私はこのニュースを見て、驚きと戸惑いが隠せませんでした。危険ドラッグは、多くの場合、自身の判断によって手が出されるものです。興味本位で薬物を使用し、挙げ句の果てには自分だけにとどまらず、他人の人生にも影響を与えてしまうこともあります。

私は何故そんなことに手を出してしまったのか、とても疑問に思いました。危険ドラッグが違法物で、自身の身にも何らかの影響が起ることくらい小学生でもわかるのではないかと思うからです。

そこで私は講演してくださった方のお話を思い出し、この自論に辿り着きました。「犯罪を犯す人たちとは、周りに支えてくれる人が少なく、心に余裕がなくなってしまうから、命の大切さを忘れて自分の身を捨てるようなことをしてしまってはいけない」。そうだとすれば、テレビ越しに見ていたこのニュースは遠い物ではなく、私達一人一人が互いに支え合うことによって、こういった犯罪を少なくすることができるのではないかと思いました。

そのためにも、日頃の感謝を忘れずに、周りの人達と支え合い、命を大切に生きていきます。

【警察庁長官官房長賞】

「今」

(静岡県警察)

静岡県立吉原高等学校 三年

芦澤沙奈美
あしざわさなみ

初めに、私は今回の講話を聞くことができて、よかったです。自分が今、ここにいることの奇跡と幸せさを再確認することができたからです。

講話を聞く中で、今の生活が当たり前ではないことや、家族、友人のこと、幸せについてなど、多くのことを考えました。特に、

「目を閉じて、大切な人の満面の笑顔を想像して聞いてください。」

と言われそのようにして話を聞いた時、家族や友人の笑顔を思い浮かべ少し涙が出てきました。いつでも見れると思っていた顔が自分の前から消えてしまう、それはとても悲しく、寂しいと感じました。実際に失う痛みは測り知れませんが、想像したくも、知りたくもない痛みだと、心の底から思いました。それと同時に、今こうして笑って生活できることに幸せを感じました。

いじめの苦しさから自ら命を絶つ人もいることをニュースなどでよく耳にします。言葉にすればたかが三文字です。しかも、いじめる側から

したらゲーム感覚だつたり、自分のストレス解消だつたりと軽い気持ちですが、それをうける側からしたらとても重いものです。この三文字にどれだけの苦しみがこめられているのか、それは実際にうけた人達にしかわからないものです。朝起きることに、学校に行くことに、教室の扉を開けることに、クラスメートの笑い声に、恐怖を感じるのです。何で今日もわざわざ苦しみに行かなくてはいけないのだろう、何で自分なのだろう、何で誰も助けてくれないと毎日頭の中でぐるぐる同じ事を考えて一日を終えるのです。家族には心配かけたくない、友達には知られたくない、そう思つて笑顔を貼りついている人もいるでしょう。それはとても辛く、疲れます。また、他の人達も自分が標的にならないようになると自分を作ります。それはとても息苦しく、自分は何をやつっているんだと虚しくなります。皆、自分以外信じられないくなるのです。でも私は、ここで死んでもいじめてた側からしたらだからどうした、と思われるだけだと思います。自分を苦しめていた人の為に自ら命を捨てるのはおかしいと思うのです。自分が命を大切にすることとしか今を変えることはできません。自分が死んでも悲しむ人なんかいないと考えるのは自分の大切な人達に対してとても失礼だと私は考えます。家族の誰かがいなくなつたら悲しいように、自分がいなくなつたら家族は悲しむはずです。

普段口にしないだけで家族は見守ってくれている、という講師の方の言葉を聞いてその家族に頼ることも大切なことだと思いました。支えてくれる家族がいること、悩みを聞いてくれる人がいること、他にも

小さなことでも幸せなことはいつもの生活にあふれてるものです。失つてから気づくのではなく、普段から大切にしていきたいです。

「命の大切さ」はどんな人でも同じです。誰一人として、今生きていることを軽く考えていいはずがありません。いじめ、暴力、他にも様々なることで傷ついている人も多くいるでしょう。全てが全てわかり合えたり、癒える傷ではないと思いますが、生きることを辞めるのではなく、誰かを頼りましよう、わかり合う努力をしてみましょう。自分が生きているからこそできることを精一杯やることが「命を大切にする」とだと私は考えます。

当たり前つてなんだろう？

(三重県警察)

三重県立四日市高等学校二年 長野真帆

「おはよう」、「ありがとう」、「大丈夫?」、「うめんね」、「おやすみ」。こんな何気ない一言に溢れた私の日常。家族や友達、先生と言った沢山の大切な人たちに囲まれて、私は今を生きています。でも、振り返ってみると、その一日の中で「いのち」について考え、意識を向ける時間はないような気がします。きっとそれは、私が生きているからこそ訪れる素晴らしい幸せな一日を「当たり前だ。」と感じ、一日一日の重みを忘れてしまっているからでしょう。「私の大切な人が、私の前からいなくなる。」そんなこと、考えたこともありませんでした。でも、あるとき、学校で、交通事故によつて息子さんを亡くされた方のお話を聞いて、これまでの自分を反省し、「当たり前つて何だろう？」と考えるようになりました。

その息子さんは、その日の夜についての話をしてから、朝いつものようく家を出て、学校へ行つたそうです。その方は、次のように言つてみました。「まさか息子が帰つてこないなんて。そんなこと、朝見

送つたとき、考えもしなかつた。」と。「まさか自分の息子が交通事故に巻き込まれるなんて思わなかつた。電話がかかつてきただきも、どうせ大したことないだろうなど思つた。」とも言つてみました。私はこのとき改めて交通事故の恐ろしさを感じました。病氣もせず、健康に毎日を生きてきた人の日常を、たつた一瞬で奪つてしまふ交通事故。被害者の方だけでなく、被害者のご家族の心に深い傷を残し、人生を壊してしまう交通事故。本当に怖くなりました。もし自分が交通事故の被害者、もしくは、加害者になつてしまつたら。私の前の今の日常生活は一変します。この方にお話を聞いて、私は涙が出来ました。そして、今ある日常生活が沢山の奇跡によつて作られていることに感謝しようと思いました。また、そのことを周りの人たちに伝えたいと思いました。

以前、私はこんな言葉を聞いたことがあります。「あなたが何気なく生きた今日は、誰かが昨日生きたいと願つた明日かもしれない。あなたはそれだけの今日を生きましたか？」という言葉です。被害者の方の話を聞いているとき、この言葉がふと脳裏に浮かびました。毎日を健康に生きていると、ついつい忘れがちになる「生きていることは素晴らしい。」という事実。「誰もが当たり前にやつてくると思つてしまふ明日が奪われる危険がある。」という意識。そして、「自分が相手の人生、相手の家族の人生を奪つてしまふかもしれない。」という危機感。絶対に忘れてはいけません。このお話を聞いて、「絶対に忘れない。周りの人にも伝えよう。」と心に決めました。

私は今も「当たり前つて何だろう?」と考えています。きっと正しい答えは出ないだろうと思うし、人それぞれの答えがあるとも思います。しかし、私は「当たり前は存在しない。」と考え始めました。きっと同じことの繰り返しが、いつの間にか「当たり前」になるのだろうと思います。毎日毎日、何気ない言葉や多くの大切な人々に囲まれて生きているからこそ、日常生活が「当たり前だ。」と感じます。「当たり前だ。」と感じられること。それはとても幸せなことです。けれども、その幸せを「当たり前だ。」と感じてはいけないと思います。だから、私は一日を全力で生きていきます。感謝の気持ちを忘れず、大切な人々を精一杯大切にしながら、生きていきます。それが、今、私がこの幸せの中で、「いのち」を大切にし、その大きさを忘れないためにできることです。そして、周りの人を守れるように、自分も相手も大切にして、私は私の「いのち」を生きてきます。

命の大切さについて

(高知県警察)

高知県立高知丸の内高等学校三年 のむらなお

今日は、市原さんの講演を聞きました。市原さんの息子さんが犯罪被害者であり、そのような話を聞いていると、涙がこみあげてきました。でも私は、なぜ涙がこみあげてくるのか、私は市原さんに同情しているのか、よくわかりませんでした。しかし、いくつもその息子さんと私を重ねて考えていました。

私は昔、友人関係が上手いかず一人で悩んでいる時期がありました。学校の先生にも両親にも心配はかけたくないと思い、できるだけ元気に振る舞っていました。学校に行きたくない、つらいと思うことがたくさんありました。でも一度も学校を休みませんでした。すべては両親にばれたくないという一心でした。しかし、一年が経ち、我慢することができなくなっていました。この当時、姉が同じ学校に通っていたので、だいたい分かっていて、両親にも話し、家族みんなが知っていたそうです。それから、家族にすべてを打ち明けました。すごい気が楽になりました。話をするだけでこんなにも楽になれるんだなと感じました。

私は、市原さんの息子さんが家族や身近にいる信頼できる人に少しでも話をすることができればもう少しよい方向に進んでいたのですが……と思いました。比べることはできないけれど、きっと心配を

かけたくないという思いが息子さんにもあつたのではないかと思います。少し似た気持ちはあつたのだろうと市原さんの講演を聞いていて感じました。市原さんも「息子が一言、助けてと言つてくれていれば救つてあげられたかもしれない」とおっしゃっていました。だから、その苦しんでいる本人が少し勇気を出して助けを求めることがければ、きっと救いの手を差しのべてくれる人がいるのだと思いました。

生きているということは、そこに温かい手があり、その手で握ることができることなのです。」という言葉がとても印象に残っています。

私は一度だけ、冷たい手を握ったことがあります。それは親戚のおじさんが亡くなった時です。握った手はとても冷たくて、握っても握り返してくれなくて、すごく寂しくて泣いたことを覚えています。小さい頃に手をつないで歩いたり歩いていた温もりのあるおじさんの手とは思えませんでした。この時、初めて生と死というものを感じました。

生きていくということは、人と人が手をつなぎ支え合っていくことだと思います。そこに温もりを感じて安心をするのだと思います。支え合っているので人が楽をしたりいなくなってしまうと周りで支えている人たちに迷惑をかけてしまいます。だから、協力し合うことがとても大切だと思います。

今日の講演を聞いて、生きることの大切さや命の大切さについて考えることができました。命を大切にして、生き続けなければきっとこの先良いことやうれしいことがたくさんあると信じて頑張ることの大切さを教わりました。

市原さんに感謝の気持ちも込めて、命を大切にして日々頑張つていただきたいと思います。

